
ペチュニアに濡れた傘

寿甘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペチュニアに濡れた傘

【Nコード】

N9037J

【作者名】

寿甘

【あらすじ】

真面目な女性のお話です。

雨が降っています。

雨です。

最近知った事なのだけど、雨には二種類の雨があるらしいの。

一つは『冷たい雨』 この雨は水蒸気が凝結してできた水滴が氷晶になって、それがまた融けて降る事らしいの。日本では大半が、この『冷たい雨』みたい。

もう一つは『温かい雨』 こっちは水蒸気が凝結してできた水滴が、水滴のまま成長し、そのまま降る雨の事を言うみたい。

それなら今、降ってる雨は『温かい雨』ね。

折角、新作のファンデーションのお披露目だったのに、もうボロボロよ。アイライナーなんか伸びてしまつて、渋谷の女子高生みたい。ウォータープルーフなんて信じちゃダメね。

こんな事を言ったら貴方はきつと「化粧なんてしないでいいのになんて言いながら、いつもは満月のように丸々とした目を三日月のようにさせて笑いながら、私の目頭から目尻にかけて弧を描く様に優しく指でなぞるのでしょうか。その行為になんの意味があるのか分からなかったけど いえ、意味なんてないんでしょうね。

だって貴方だもの 『霧雨』のように気にもせず『にわか雨』のように突然に、そんな行為を平然に、さも悠然に行うのが貴方だものね。

今だから言えるけど、その行為はある種の犯罪よ。だってそうでしょ？

貴方が私に触れてくれるから、そんな『しなくていい行為』をしてしまうの。

そのか細い針金のような指で私を 私なんてモノに触れるから、なぞるから、支えるから、私は柄にもなく頑張ってしまったの。今考えると、とても浅はかな考えだと思うわ。幼稚な考えと言ってもいいわね けど、どうしてでしょうね？ 幼稚で浅はかとは思っても、愚かな考えとは思えないのよ。

どうしてでしょうね、どうしてなのかしらね？ 満月のような目も、稲穂を磨やしたような肌も、鷹の嘴ように通った鼻も、弓のように湾曲した大きな口も、その大きな口には似つかわしくない雨音のように儂く響く声も、小枝のように細く脆い足も、その針金のような指も

全てが、貴方の全てが忘れられない。

だから私は貴方と買った傘を棄てたの。覚えてる？ その日は雨が降っていたわ。

その時は多分『冷たい雨』の方ね。

あの時の私達はまだ高校生で、世間つてもものも分からなくて、自分の事しか考えられない子供だったわ。大人になんかなりたくなくて、けど子供扱いされる事を毛嫌いして。世間なんて分かりもしないのに、世間に否定される事を憎んだものだわ。本当、今思い出すと恥ずかしさで頬を染めるといふより頬を引っ叩いてやりたいわ…
…今も変わらないものね。

ごめんなさい、私の戯言なんて意味ないわね。やっぱ私も年齢だ

けはとつたみたい、その調子でお腹の脂肪も取ってくれないかしら？
ここは笑う所よ？

私も大学を出て、社会に出て、世間というモノを知ったつもり。恋人だつて居たわ、貴方みたいに不誠実ではない人もいたし、貴方みたいに誠実ではない人もいたの。『幸せ』という分割できる類に挟まれながら、『不幸せ』という直結しかできない類に持て囃されながら、それでもどうにかこうにかしどろもどろに私は生きてきたの。

それでも、貴方という人を、たった一人の人を忘れるには無理な年月だった。

悔しい事に、虚しい事に、貴方の存在は私の逸材だった。

このペチュニアが描かれた傘の骨の錆びを見る度に、ああ、私の想いもこれみたいに寂びてほしい。と願ったのに、その願いとは裏腹に瑞々しく潤い、肥え、日を増す毎に貴方を渴望したの。傍にいない貴方を想像し、此処にいない貴方を妄想し、自分の我儘に予想した。

それでも満たされなかった。満ちる訳がなかった。満たしてくれる訳なんてなかったの。この地球がどんなに雨に濡れようと満たされないように、私の心は満たされなかった。

ペチュニアの花を見る度に私の苦勞もいつか変化するだろうか。と思つたけど、ふと、思うとその苦勞を私は大事に抱えて生きていた。変化を恐れ、成果を拒んだ。貴方から他の誰かになる事を恐れ、拒んでいたの。

その時、私は分かつたわ。

私は貴方に溺れて死にたかつたのだと。

私は貴方に満たされ死にたかつたのだと。

私は貴方に恋して死にたかつたのだと。

だけど、それはもう叶えられない。夢は夢のままで、現実が現実のまままで終わってしまった。突然の変化は本当に突然に起き、忽然の成果は私に有無を言わず現実を引き戻した。泣く暇さえ与えず、啼く声さえ届かず、私は現実を引き戻されたの。

貴方はもういない。

それが現実だった。それが今現在の現実になった。変化も成果も起きてしまった。その耐えがたい現実には私はどうすればいいの？ 貴方なら笑って流すでしょうけど、私には到底不可能。真面目な私には、こんなモノは耐えられない……。

どうしたい？ どうすればいい？ どうしたらいい？ どうなればいい？ どうされればいい？ どうやればいい？ どう行えばいい？ どう贖えばいい？ どうされたい？ どう変わればいい？ どう変わらなければいい？ どうやりたい？ どうやらされたい？ どう生きたい？

誰と逝きたい？

それは叶えられるはずの夢だった。私は愚直で、それさえも忘れていたの。今更になって気づく貴方の重みは、満たされぬ器には入り切れなかった。その自分の愚かさを呪い、この自分の真面目さを愛し、私は貴方に逢いに行こうと思います。

右手に握る傘の骨を、自らの首に突き付け、暗い部屋の隅、満月の夜空を背に私は一瞬の狂いに身を任せ、その鋭利に尖った骨を喉元に突き刺した。

雨が降っています。

雨です。

赤いペチユニアを洗い流すように、
『温かい雨』は優しく、
儂く
流れ落ちてゆくのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9037j/>

ペチュニアに濡れた傘

2010年10月8日15時12分発行